参考：平成 22 年度 参加者の声
～ アンケートより一部抜粋 ～

・具体的な導入事例が非常に参考になった。また、学生のインセンティブとして、ポートフォリオを卒業時に配布するアイデアは非常に有効だと思う。(30 代・第 1 分科会参加)

・今回得たものをどこまで具体的に落とし込み、発展させていけるか、自大学に戻って様々な人と議論してニーズを見極める必要がある。(30 代・第 1 分科会参加)

・職員が一歩踏み出して改革していかなくてはならないという使命感を得た。そのために大学の理念、現状、ゴールを常に確認しておく必要がある。(30 代・第 1 分科会参加)

・全国に新しい人的ネットワークを作ることができた。通常の仕事の場面では、利害関係もあり、なかなかできないような関係を作ることができ、満足している。(30 代・第 1 分科会参加)

・真新しいことではなく、今まで行ってきたことや現在行っている取組みなどに対して視点を変えることによって相互理解を深めるなど、地道な活動から始めることが重要であると認識した。(30 代・第 2 分科会参加)

・自学の教員と職員の協働に関する課題や今後の取り組み方について方向性が見えてきた。改善点のみならず、自学の恵まれた点も認識することができ、実り多い研修となった。(40 代・第 2 分科会参加)

・他大学の取組みや企業の事例発表から自大学の取組みに対する遅さがわかり、帰ってから早急に取組まなければならない課題が多く発見できた。(30 代・第 3 分科会参加)

・情報公表を通じて、縦割が目立つ大学に横糸を通したいと考える。そのためにも、広報部門の特長を生かして組織内と関係を築きたい。(20 代・第 3 分科会参加)

・一方的にデータを載せるだけでなく、見る側にとってわかりやすく、また共感を得られるような情報の公表が必要だと考えた。(40 代・第 3 分科会参加)

・他大学との情報交換、情報共有、及び図書館や大学をとりまく環境、状況へ変化していることなど、学内外の情報チェックを行い、先を見通す力をもっと養いたい。図書館及び大学が変革できるような検討・取組みを推進していきたい。(40 代・第 4 分科会参加)

・「図書館として」ということに固執せず、新たな学習支援の場として、すべての学生の通りみちになればと思う。全学的なプログラムに図書館が関わっていこうとした時に、図書館員としての力、大学職員としての視点で向き合う力がなければいけないと感じた。(20 代・第 4 分科会参加)

・法人まで話を通すなど、これまであまり意識してこなかった部分があることに気づいた。結論がこうだという正解に行き着かないかもしれないが、情報部門のあり方を考えること自体が大事だと分かった、今まで考えていなかった。(20 代・第 5 分科会)

・大学改革の必要性はどの職員も感じていると思うが、具体的に誰がイニシアチブをとってやっていくのかという点を明確にし、学内で承認を得る必要があると感じた。自分が変わることで相手も変わると思う。(30 代・第 5 分科会参加)

・大学情報化の推進は情報システム部門のみで達成できるものではなく、利用者や経営層を巻き込んでいく必要があることを学んだ。(40 代・第 5 分科会参加)

・課題について大局的な視点でとらえ、自由な発想で検討し、現実的に解決していくための手段を講じていくことが大切だと、この研修会で強く感じた。自分の視野が狭く、硬直していたことに気づいた。この気づきを業務への姿勢に生かしたいと思う。(50 代・第 6 分科会参加)

・分科会では、ほぼゼロベースで制約をほとんど意識しない戦略を議論した。しかし、実際は部署間連携、費用、設備等の制約が生じる。今回の研修で得た戦略を自大学の状況と合わせて出来る事から始めたいと感じている。まずは、コミュニケーション活性化の必要性や、きっかけを大学が提供する必要性などから考えて提案できればいいと考える。(20 代・第 6 分科会参加)